

「拉壮丁」から見る沙汀 1931 年 —1949 年の小説創作

潘 一 嵐

0 はじめに

沙汀は1904年に四川省安県の没落した地主家庭に生まれ、1922年には四川省立第一師範学校に入学、五四新文化運動の思潮とマルクス主義に触れて新文芸に対する興味も抱くようになった。のち革命活動に参加することになり、1927年の春、中国共産党に入党する。1931年、小ブルジョア知識人の苦境を描く『俄国燈油』を創作し文壇デビューすると翌年には左翼作家連盟に加盟、数々の現実社会を反映する作品を書いた。建国前の沙汀の創作は、1931-37年の左翼創作段階、1937-45年日中戦争段階、及び1945-49年国共内戦段階の3つの時期に分けられる。これらの作品は主に左翼文学の立場から、暴露諷刺の手法を用いて国民党の反動政策を摘発し、現実社会（特に国民党の支配にある四川社会）を反映するものである。かつては自給自足の小農経済が栄え、古くから「天府之国」と呼ばれていた四川は、近代に入ると軍閥の混戦などにより閉鎖的で混沌とした地域となり、様々な現実の課題が生じた。「拉壮丁」はそうした現実の問題の一例である。

「壮丁」というのは、即労役や軍役にあたる成年の男子を指すことである。「拉壮丁」とは、強制などの不正の手段を通して、もともと軍役に当たらない人民を徴発することを指す。四川の近代史を振り返って見ると、兵役問題は終始深刻な問題であり、「拉壮丁」も絶えることがなかった。軍閥時代には「川軍四巨頭」（劉湘、劉文輝、鄧錫侯、田頌堯）をはじめとして、各地に小さな軍閥が成立し、防区と呼ばれた根拠地を所有して互いに戦争を繰り返していた。次

第に消耗していく兵力を補充するために、常規の募兵制と宣撫のほか、「拉壮丁」が次第に行われるようになる¹⁾。日中戦争が勃発すると、当時川康宥靖公署主任および四川省政府主席であった劉湘は全面抗戦を力説し、「為民族就往抗戦告康川軍」と発表し、川康軍に対して出川抗戦（四川から出て戦いに立ち向かおう）を呼びかける。抗戦期間中、四川省は前線で必要とされる大量の兵員の徴集において、他の省を大きく上回っていた四川省が抗日戦争で募集した壮丁は全国の徴兵人数の20%以上を占めていたとされる²⁾。川軍が抗戦勝利に大きく貢献をしたことは否定できない事実だが、徴兵に伴う混乱は顕著であった。日中戦争後、国共内戦に再び突入すると、国民党政府は新たな兵役法を制定し、徴兵の定員を規定したものの、共産党との戦争が激化するにつれ、正規軍以外、基層の保安隊や警察局も、拉壮丁を行った。

文学作品の現実的効用を重視する左翼作家である沙汀は、この現実問題に関心を持っていた。「拉壮丁」は重要なモチーフとしてしばしば彼の小説に書かれている。具体的には、『凶手』（1935）、『在其香居茶館里』（1940）、『替身』（1945）、『呼嚎』（1945）、『煩惱』（1946）、『李蝦扒』（1947）などの小説が挙げられる。本論は、「拉壮丁」という同一のモチーフの異なる語り方を手がかりにして、各時期に沙汀の創作方法にはいかなる特徴があったか、その創作特徴が「拉壮丁」の描写にどのように反映されているかについて考察し、沙汀の建国前の創作個性と独自の小説スタイルの形成を明らかにすることを試みる。

1 「時代の大潮流の衝撃圏」から「四川の片隅」への転向——「四川郷土作家」の誕生

沙汀は文学創作を始めた当初から、「ある感動的な出来事から着想を得て、その出来事が持つ社会的な意味を発掘し、それを私の創作の素材として作品に反映させた」と述べ、自分の創作目的については「自分の作品が大きな社会的な影響をもたらすことを企んでいる」と語っている³⁾。1931年から文壇に登場した後の三年間に、『愛』『航線』という二つの小説集を出版し、土地革命運動と労働人民の目覚め（『法律外の航線』、『平平常常的故事』、『野火』、『老人』、

『酵』など)、貧しい農民の生活(『風波』、『土餅』、『老太婆』)、戦争が人々にもたらした災難(『戦後』、『撤退』、『漢奸』、『恐怖』)、小ブルジョア知識人の苦悶(『孕』、『瑩児』)など)あらゆる側面から、「時代の大潮流の衝突圏」(沙汀は1927年から十年間、故郷の四川を離れ、上海にいた。この時代を沙汀はこう呼んでいる。)⁴⁾内の現実に触れる短編小説を20編以上も書き続けた。沙汀は政治的情熱を抱きつつ、当時の社会に影響を与えた重大な事件に関わる作品を多く書いたが、当時話題になっていた事件を巡る創作は、主に間接的に手に入れた材料(新聞ニュースなど)に基づいて書かれている。そのため、ほとんどの創作は彼が題材に対する先入観を持って書いたものであったため、公式化、概念化の傾向を呈していた⁵⁾。こうした問題を意識した沙汀は、1935年の冬、四川に戻ったことをきっかけに、作風を変化させる⁶⁾。馴染みのない上海都市に比べ、自分が育った四川郷土からは、より多くの創作素材を見つけ出すことができた。これ以降、あらゆる方面から「時代の大潮流の衝突圏」を描写することを盲目的に追求する代わりに、四川の隅の現実を深くまで掘り起こすようになり、個性的な成熟の境地に向かって一步一步踏み出すことができるようになったと言えよう。以降、沙汀が書いた小説のほとんどは、物語、人物、背景が四川省で取材された作品である。そのうち、1935年に書かれた『凶手』という短編小説は、四川軍閥による「拉壮丁」を記録した物語である。

2 民国軍閥時代における巴蜀農村の苦難の悲歌——1937年以前の「拉壮丁」叙述

『凶手』は、「1925年の春」のことを書いている。主人公の断腿天兵(足の無い神兵)とその弟は壮丁として捕まると、弟は逃げようと試みるが、失敗して将校に捕まってしまう。断腿天兵は将校に弟を許してもらうように奔走するが、逆に逃兵に対するより効果的な処罰方法を検討している将校たちは、彼に自らの弟を銃殺させるよう迫る。弟を愛する兄は最終的に自らの手で弟を殺さざるをえなくなる。断腿天兵がついに戦場から逃げて家に戻ると、彼の父親は彼の話信じず、その傷にも同情せず、逆に家から追い出してしまう。それど

ころか、彼を兄弟殺しの犯人のように扱う。唯一彼に同情を示す母親はこっそりと食べ物を与えたが、そのたびにいつも彼を悲しませる話ばかりを語る。このような生活に耐えられなくなった彼は、「涙の味の食事」を受け入れないと決意し、乞食の生活を始め、王爺廟の中で孤独な死を待つことになった。

この物語は、四川の軍閥混戦の背景における「拉壮丁」の悲惨な現実を描いたものである。では、この小説に代表される、1935年から37年までの創作動機と創作特徴はどのようなものであったのだろうか。

四川郷土作家としての方向性が明確になった沙汀は、依然として明確な政治的立場で文学叙述を行っており、社会の闇を暴露しようとする姿勢に変化はない。また、『凶手』の兄弟殺しに見られるように、故郷四川の苦難を記録するために、またより批判性を深化しようとしたために、一部の作品を「悲劇的」な特徴に仕立て上げている。

『凶手』のプロットの構築と人物像の創造からみると、兄弟の殺し合いや断腿天兵が孤独な死を迎えるという悲惨な出来事に加え、現実社会の残酷さを一層浮き彫りにするために、沙汀はまた他の側面に注力している。例えば、断腿天兵のイメージを形作る際に、彼を読者に好まれるキャラクターに仕立てる工夫が見られる。彼の日常生活での質素で温厚な性格を強調しているほか、弟と共に参軍させられた際には、弟を巻き込んでしまったことに対して罪悪感や忸怩たる気持ちを抱かせている。感受性と優れた心の繊細さを書き込んでいるのである。また、弟の命乞いをする際には、自分の命で弟の命を救うよう懇願するなど、自己犠牲的な精神を描き出している。軍閥部隊の野蛮な行為が断腿天兵の悲劇を引き起こす根本的な原因である一方、人と人の関係（親子や兄弟の絆）の複雑さや不信感が、彼の心の傷を一層深めていく。こうした描写によって、読者の同情心を引き出している。李慶信は、こうした創作は軍閥の野蛮な支配を深く暴露すると同時に、悲しい世相や社会の後進階級の冷淡さに対する批判の矛先を向け、悲劇性をより深みのあるものにしてしていると指摘する⁷⁾。30年代の四川は極端な暗黒と動乱の時期にあった。1935年、沙汀が四川に戻った時は、まさに極めて深刻な干ばつの影響が広がっていた時期であった。彼は「儀

隴城の外は至るところ死人を埋めた万人坑です。野良犬が死骸を奪い取って食べて、腸の胃袋や足と腕の切断をあちこちに引きずり寄せています⁸⁾」と記している。被害の深刻さ、庶民の苦難に打ちのめされた沙汀は、『凶手』の他にも『獣道』（1936.5）や『在祠堂里』（1936.6）など、一連の悲劇作品を書いている。これらの作品では、沙汀は初期の作品にみられたような、新聞通信から拾った素材を組み合わせる作法を捨てている。実際に経歴していない出来事を自分の主観的な印象に基づいて書くこと、公式化された作風を乗り越えているのである。その代わりに、自らの経験と経歴に基づいて熟知している四川農村社会の描写に集中し、軍閥時代の四川農村の苦難の現実を再現し、巴蜀農村の苦難の悲歌を書くこととなった。文壇からは「四川の田舎の叙情詩⁹⁾」という賛辞を受け、魯迅からも「優秀な青年左翼作家¹⁰⁾」と高く評価されている。

一方で、作者のこのような創作には「適切な度合いを失う¹¹⁾」という批判もなされた。兄弟の殺し合いのようなドラマチックで悲惨な事件や、人と人との関係を過度に陰鬱に描くことで、作品があまりにも「重苦しすぎる」印象を与えてしまったとの指摘がある。さらに、創作動機を先にして物語を構築しているため、プロットから登場人物の描写まで、作者の意図が明確に反映され、それが逆に真実味を失わせている。人物の性格や兄弟関係に関する unnecessary 記述がなされているため、現実を批判するという目的を越えてしまい、また物語の信憑性や読者の共感を損なってしまう面もあった。そのほか、沙汀は五四文学から「運命」「自由」「倫理」などの啓蒙的な話題を引き継ぎ、度々自身の作品の中で取り上げているが、これらの彼の創作目的と得意範囲を超えた未熟なテーマについては、深く掘り起こそうとはしない。その結果、一見すると小説の内容は豊かになったが、小説の題材そのものが本来持つ感染力と扇動効果がある程度弱めたとの指摘もある¹²⁾。沙汀は左翼の後輩として才能を発揮し、先輩から称賛をもらって励まされながらも、一人前の作家としてはまだ未熟であり、この時点ではまだ文壇に地位を占めることはできていなかった。『凶手』などの四川社会から取材した作品は沙汀の初期の文学的な探索の成果であり、その出発点と見なすこともできる。

総じて言えば、『凶手』は庶民の立場に立って、無辜の民衆が軍閥によって強制的に参軍させられた事件を手がかりにして、民衆を殺害し、人命を軽んじる反動勢力に対して強い非難を投げかけるものである。日中戦争が勃発すると、軍閥の影響力が変わり、それに伴い「拉壮丁」という問題も単なる軍閥の残虐支配に限らず、より複雑な兵役の問題を反映するようになっていく。沙汀の創作も次の段階に進展することとなった。

3 四川社会群醜図の構築——日中戦争期における「拉壮丁」の諷刺物語

前述の通り、四川省は日中戦争期において多くの兵力を供出した。1933年6月に国民政府が公布した「兵役法」によると、人口比率に応じて壮丁くじで徴兵するべきであるとしている。しかし、中央の管轄から遠くなるほど、兵役制度の不正は深刻になる。四川の状況を見ると、地方の末端組織機構の混乱や人事制度の腐敗により、上層階級は賄賂と身代わりを使って兵役を逃れようとするし、貧民階級もなんとかして兵役を避けようとする。これにより、人数を補うために武力などの不正な手段で兵役を強要することが次第に行われるようになった。当時の新聞を検索すると、四川の「拉壮丁」を批判する評論がしばしば見られる¹³⁾。沙汀も「拉壮丁、及び拉壮丁によって農村で引き起こされた不満と悲劇は、ただならぬものだと言える¹⁴⁾」と述べ、民衆もこれに対して多くの不満を抱いていた。1940年、沙汀は小説座談会に参加した聴衆から一つの非難の意味のあるメモを受け取る。そこには「田舎での拉壮丁がごたごたしているのに、作家はなぜ暴露しないのか?」とあった¹⁵⁾。このような指摘を受け沙汀は民衆の期待に応じて、1940年12月1日、『在其香居茶館里』を執筆することとなった。

3.1 『在其香居茶館里』——「拉壮丁」をめぐる茶番劇

『在其香居茶館里』は四川農村回龍鎮の二人の実力者、聯保主任の方治国と地方実力派の邢么吵吵が拉壮丁のことで其香居茶館で喧嘩と殴り合いを起こした様子を描いたものである。

前任の県長が徴兵の問題で解任され、新任の県長が徴兵をめぐる不正を一掃

すると宣言したのが背景である。邢幺吵吵の次男は、家の権威で四度兵役を免除されていたが、今回、方治国の密告で兵役課に連行されてしまう。二人が茶屋で出会うと、邢幺吵吵はことばを重ねて方治国を挑発する。自分が悪いと知っている方治国は柔軟に対応をするが、邢幺吵吵の怒りは少しも収まらない。また方治国が金銭で人を償うことを承諾しなかったため、徹底的に邢幺吵吵を怒らせた。邢幺吵吵が「怒ってひげが震えて、しっかりと彼の襟元をつかんでから街頭に引っ張」ると、双方は激しい殴り合いを繰り広げ、二人とも大けがを負うこととなる。二人が大騒ぎをしているところに、米屋の蔣門神が、邢幺吵吵の息子はすでに解放されたという情報を持ってくる。刑大老爺（邢幺吵吵の父親）が予め新任の県長とひそかに結託して取引をして、兵役課が邢幺吵吵の息子を解放したのである。

中裕史が「善と悪」の対照ではなく、「悪と悪」の対照を書くのが沙汀の特徴と指摘した通り、この作品では対照的な両タイプの「実力者」——攻撃型の邢幺吵吵と守備型の方治国が、四川人に馴染みの深い茶館という同じ空間に登場する。そこで発生した両者の争いという事件に焦点を合わせ、あてこすり、口論、仲裁、殴打、意外な結末、という進展ぶりを鮮やかに切り取って描写している¹⁶⁾。聯保主任の方治国と地元実力派の邢幺吵吵、この二人の「体面を保てる人」はついに「体面を汚すこと」になった——一人は殴られて「鼻血が出ていて、左の目が青々と腫れている」し、もう一人は「息を切らして齒の血を垂らしている」。方治国も邢幺吵吵も、どちらも地方社会の中で「毒虫」のような存在で、職権を利用して賄賂を受け取り、私情にとらわれて不正を働いている。この否定的な二人の人物の殴り合いが観衆の見物を誘い、快哉を浴びせられると言ってもいい。そして、二人が激しく争っている最中に、蔣門神が持ってきた情報がこの争いを終結させたが、すると先のすべての争いが無意味のように思われることになる。また、地位のある人物が殴ったり騒いだりして解決できなかったことが、足の不自由な社会低層にある米屋のわずかな言葉で解決されている点にも喜劇性が現れている。

正面から拉壮丁の経緯を描いてはいないもののこの茶番劇を通して、地方

兵役制度の名実存亡による混乱した状況を側面から力強く暴露し、これらの混乱を招いた末端官吏や実力者を諷刺しているのである。

3.2 『替身』——身代わりの物語

1944年4月28日、沙汀はもう一編の兵役制度を反映した小説『替身』を執筆した。『替身』は『在其香居茶館里』の物語の補充と言える。つまり、もし刑幺吵吵の息子のような人が何度も官紳の権威を借りて兵役逃れをしたのなら、その代わりに徴発されたのは誰だったのかという疑問に答えるものである。

『替身』の物語は保長である李天心の悩みから始まる。緊急徴兵の期限が迫っており、接兵連も催促にやって来るし、村長は机をたたいて大声で罵り、彼に明日の朝早くまで欠員を補充する命令を出す。まだ一人の壮丁が欠けているが、適齢期の壮丁を一人引き出すのは簡単なはずである。しかし、適齢期の人間は親戚であったり、親戚の親戚であったりする。また、彼より地位の高い人間と関係していたりもして、徴発することができない。物語は李天心がどのようにしてこの該当者を見つけ出すかをめぐって展開される。

良い方法が見つからない李天心は外地から来て旅館に泊まっている商人を壮丁として徴発しようとする。旅館に塩客（塩を売る商人）がいると聞き、大勢で捕まえに行くも、適齢期ではない老年塩客しかいない。老年塩客のひげを剃って若者のふりをさせて壮丁に仕立て上げる。というように、この小説は平民を強引に徴兵する過程を描き、『在其香居茶館里』に比べて、兵役問題における地方官吏をより直接的に暴露している。名目上の徴兵は本籍の適齢期の「壮丁」を必要としているが、他地方からの滞在中の老年塩客を身代わりにしようとするのである。

4 「四川」と「諷刺」の合流——独特な小説風格の完成

日中戦争が始まると、戦争は四川の人々の愛国心を喚起して救亡と改革の波に身を投じさせるところか、かえって彼らの懦弱、愚昧、貪婪を促した。そのため、四川社会の暗黒はいつの時代よりも、徹底的に暴かれたと思われる。一

方、直面している現実がさらに暗黒なものであるにもかかわらず、『在其香居茶館里』と『替身』などでは『凶手』のような重苦しく陰鬱な雰囲気はもはやなくなり、その代わりに喜劇的な要素が現れている。それでは、この変化を通じて、沙汀の独特な小説風格はどのように形成されたのだろうか。

4.1 底層人民から末端行政者や実力者へ——視点の変化とユニークな悪人像の登場

前述の通り、『凶手』を典型とした早期の創作は常に下層の人民の視点に立ち、人民の苦難に焦点を当て、社会の現実の中で最も暗い一部分を選び、国民党の軍隊の兵士、西洋兵などの貧しい下層の人民に対する搾取、戦争と災害が人民にもたらす苦境、四川軍閥の恐怖統治と野蛮な暴行の下での死亡や残酷な場面などが描かれている。また、作品の中心には悲劇性が強調されており、小説の重点も悲劇的出来事の描写に置かれていたため、登場人物の性格はあまり鮮明ではなく、「重要性がある（圧秤的）人物をなかなか書けない¹⁷⁾」と沙汀自身も悩んでいた。

一方、『在其香居茶館里』、『替身』などの日中戦争期の創作は、早期「悲劇型」の小説と異なり、抑圧された労苦庶民（断腿天兵など）の側に立つのではなく、諷刺する対象である四川田舎社会における末端の行政者や実力者（方治国、邢幺吵吵、李天心）などに焦点をあて、抗戦期の「救国」、「国防」などの新スローガンの下で行われる様々な利己的な行為を叙述する。沙汀の叔父、鄭慕周は四川省の秘密結社「哥老会」の重要メンバーであり、幼少期から彼は叔父に付いて、常に県城や村の間を行き来し、外地へ知らせを届けたり、武器を運送したりするなどの危険な活動に参加していた。この地域の暴力組織、およびこれと結びついた官僚世界を直接体験する機会が多かったため、彼は四川農村社会における各種社会勢力の複雑さや実力者の状況を、他の作家と比べてより熟知していたと言える。そのため、沙汀は常にこれらの人物が悪事を企てる際に遭遇する各種の問題や苦悩に題材を得ている。例えば、方治国は新しい県長の改革政策を心配しており、李天心は徴兵の任務を完成できないことを悩んでいる。

彼らは庶民から財産を搾り取っているが、自分たちの地位が高くないため、より上位の権力者からの圧迫も受けている。沙汀は普通の農民が貧困の悪循環に巻き込まれているだけではなく、比較的上層部に位置する末端行政者も同様に貧しく生きていることに着目している。彼らの悩みを味わいつつも、気まずい状況に追い込むことで、同情を引くのではなく、これらの人物をさげすまれたり、翻弄されたりすることで、読者に快感を与えられる。

陳平原は、1930、40年代の官僚像を一つのグループと見なし、その喜劇性は「自分が思っている強さと歴史の必然的な傾向、自分が思っている正義と観衆の判断力の間の深い矛盾にある」と指摘している。また「醜ければ醜いほど、外部の勢力を借りて肝っ玉を太くし、醜さを増す¹⁸⁾」とも述べる。『在其香居茶館里』、『替身』では、亡国の際に暴れたり、強がったりする敗者の官僚を喜劇的なタッチで描く。これらの支配者は自分たちのしたことを「救亡」「国防」「整頓」などのスローガンの下に隠していた。このスローガンと実際の状況の間の矛盾が、喜劇性の源である。

加えて『在其香居茶館里』などの諷刺小説では、諷刺対象のキャラクターの特徴を重視し、これらの異なる悪人が違った特色で書かれている。たとえば邢幺吵吵は、権勢を笠に着て、後ろ楯を持っているので、普段は「何も忌まない(不忌生冷)」キャラクターである。聯保主任の方治国は「軟硬人」で、「虎に会うと羊になるが、もし相手が羊であつたら虎になる」とされている。これらのユニークな悪人像を作り上げることによって、沙汀は優れた諷刺を完成し、独自の創作スタイルを作り上げているのである。

4.2 創作パターンの変化：極端な事例から四川日常生活へ

創作視点が末端行政者や実力者に移行したことに伴い、地方軍閥の支配の残酷さを暴露することに重点が置かれた創作パターンも変化を生じた。『在其香居茶館里』などの日中戦争時期の創作はいずれも、人々の日常生活から巧みな発想をすることに重点を置いている。日中戦争期間、沙汀は一旦前線の延安へ行ったが、1940年に故郷の川西北の農村へ帰り、雎水関で十年余り蟄居し、戦

時四川社会の各方面の状況を十分に汲み取っていた。「素朴で孤立した日常生活の中から、現象の裏に隠れた本質を見出し、一点からそれに関わる幅広いものを連想する¹⁹⁾」ことで小説を構想した。『凶手』などの小説は極端な事例を軸に描かれており、その凄まじさは並ではない。一方、『在其香居茶館里』、『替身』の物語はすべて原型があり、実際の出来事に取材したものである。前者は華裕農場のある農技師の話に由来しており²⁰⁾、後者はある老人が沙汀に語った自分の境遇である²¹⁾。四川の田舎町の日常生活に取材することによって、山に囲まれた閉鎖的地域、現代化から離れた立ち遅れた景観と人々の一種の時代離れした生き方が小説に再現されている。四川茶屋、小さい田舎の人間関係の網、悪勢力の対立など、当時の四川社会の特徴を反映する要素が描かれる。四川方言をもちいたユーモアの運用などからも、四川の日常生活が沙汀の思想資源に与えた影響を体現しており、このような「四川」と「諷刺」の合流は、沙汀の創作が他の作家と異なる美学風格を備えていることを示している。

1941年、欧陽山が抗日以来の中国小説を紹介した時、沙汀を「中国の有名な諷刺短編小説家²²⁾」と紹介した。その後、文学史の紹介でも「沙汀」と「諷刺」が結びつけられていることが多い。沙汀は独自の小説スタイルを完成させ、「生身の四川農村末代封建階級群醜図²³⁾」を構築し、その諷刺小説は質朴で真の円熟の域に達したと言えよう。

5 反内戦の訴え——国共内戦期における「拉壮丁」の語り

日中戦争がようやく終わったころ、沙汀は国内の平和を願っており、1945年10月10日の国共会談に期待をかけている。しかし、国民党と共産党は最終的な合意に至らず、双十協定もついに破綻を迎え、本格的な国共内戦に再び突入する。戦争が激しくなるに従い、徴兵情勢も厳しくなり、長期の戦争に倦んでいる国民は非常に苦悩していた²⁴⁾。沙は内戦が避けられない情勢に苦しみ、国民党の戦争準備の一つである徴兵政策に対して批判する意図が強烈になっていく。

5.1 被害者である農民の苦境の再現——『呼嚎』『煩惱』

平和の願望が潰えた後、沙汀は兵役の被害者である農民の苦境を描く小説を創作した。代表作は『呼嚎』と『煩惱』二篇が挙げられる。

『呼嚎』（1945年12月10日作）は、日中戦争期に壮丁として拉致された夫の帰りを期待する廖二嫂の角度から語る。戦争がようやく終わり、夫がすぐに家に帰ることを楽しみにしているが、長らく帰らず、手紙も届かないため、心配している。廖二嫂は何度も郷民代表主席に怒り、夫の帰りを促したが、何の効果もない。最終的に夫は帰らず、共産党との戦争に再び身を投じるという通知を受けた廖二嫂は、さらに苦悩することになる。

『煩惱』（1946年9月）は、主人公の劉久発が国民党の徴兵命令に壮丁として徴発される前の物語である。劉久発は徴発されたくない。兵士にとられたならば逃げればよいと思っているが、逃げるのは難しそうである。郷長に賄賂を渡して兵役逃れをすることもしたくない。そもそもたとえ賄賂を渡しても頼みが聞き入れられる保証はないし、新婚の妻を残して一人で逃げることもできない。いくら苦悩しても、良い方法が見つからない劉久発はやむを得ず内戦に身を投じるしかない。

この二篇の小説は国民党徴兵の被害者としての底層農民の角度から、民衆の平和への憧れや作者の内戦への反対を表している。その語り方からは、作家の創作目的をはっきり読み取ることができる。日中戦争期の『在其香居茶館里』『替身』などでは、作者が一定の距離を置き、冷静で含蓄のある創作となっていたが、この時期の作品ではそのような距離感が喪失している。プロットにおいては、作者は対立の作りに工夫しておらず、物語の発展、登場人物の心理や行為はすべて、作者の創作目的の枠に縛られており、単なる作者の意図をそのまま垂れ流す道具として存在している。『煩惱』は作品名からすでに作家の意図を表している。内戦勃発、徴兵が始まり、人々の生活がまた徴兵によって苦しむことを伝えているのである。内容から見ると、語り手は移動カメラのように、主人公劉久発、彼の父、母、祖母、妻を撮りつつ、彼らの徴兵による煩惱を提示する。そのほか、他の家庭もカメラのフレームに入り、内戦により起こ

された混乱が捉えられている。『呼嘯』に至っては、作者は登場人物の口を通して四度も「私たちは日本人との戦争が終わったらと約束したのに²⁵⁾」というスローガンを繰り返して叫び、国民党の内戦を挑発する行為への不満を露骨に表現する。さらに、廖二嫂が「うちの廖さんは共産党とは何の恨みも仇もないよ²⁶⁾」と嘆くことから、沙汀の政治的立場は一目瞭然であり、民衆にとっての敵は国民党であることが示される。沙汀は、語り手と作中人物との距離を意図的に保とうとせず、プロットの自然な展開から外れて登場人物に唐突な不協和な発言をさせることによって、国民党が内戦に突入した行為を包み隠さず批判したのである。この時期の創作はほぼこのような特徴を持っている。他の作品の例を見ると、『範老老師』では、範老老師は「内戦を反対しない人は一人もいないよ！²⁷⁾」と叫ぶ。『蘇大個子』では、蘇大個子は友達と兵役の辛さや軍隊の将校の暴虐について語る際、「突然に彼が晋南豫中で接触した共産党部隊のことを思い出し」、「八路軍！八路軍にはそんなことはない。殴り、罵ることは一切ない！と高ぶって言う²⁸⁾」。また、小説の結末では、蘇大個子が逞しく勇敢なストーリー（共産党軍隊の話を目指す）を、非常に興奮して語る。これは共産党軍に参加する決心を暗示している。蘇大個子というキャラクターは、危険だが生計を立てるために軍隊に参加するか、それとも田舎に留まってつまらない日々を続けるか迷っている。こうした葛藤は興味深いが、沙汀は蘇大個子の内面を掘り下げて探求する欲望を捨てている。1944年に書かれた『困獸記』では田舎知識人の葛藤が描かれており、沙汀に人物の内面を書く腕があることがわかる。しかし、蘇大個子の人生の進路に関する苦悩と迷いは、ただ八路軍が進路だという宣伝をするための下地となっているだけである。沙汀自身もこの間自分の創作が冷静でなくなっていることを意識していたが、強烈な感情を抑えられず、自分の作品を「敵への投槍」とみなしていた²⁹⁾。つまり、政治効用が文学性、あるいは芸術効果より優先順位を占めていることが、沙汀のこの時期の創作の重要な特徴であり、明確な政治立場がある沙汀の選択とも言えよう。

5.2 諷刺小説の絶唱——『李蝦扒』における「拉壮丁」の一連の詭計

中裕史は四川作家である李劫人、艾蕪そして沙汀の創作個性を分析する際、沙汀の本領は行政側を批判する小説によりよく発揮されていることにあると分析する³⁰⁾。兵役の混乱に苦しむ人民の苦境を訴える小説と比べ、沙汀は明らかに壮丁を徴発する側（すなわち保長などの基層行政者たち）に焦点を当てた作品を書くほうがうまい。

1947年に執筆された小説『李蝦扒』では、保長である李蝦扒の心理と行為が中心に描かれ、彼が一連の詭計を弄して壮丁を徴発する経過が綴られている。徴兵の情勢が厳しいため、人々は十分に警戒している。若者たちは徴兵から逃れるために村を出て都会に行ったり、有力者の元に身を寄せたり、夜間は家に戻らず野外で泊まったりしている。この背景のもと、徴兵任務を担当する李蝦扒保長は徴兵任務の遂行を確保するため、一連の策略を巡らせる。

ますます厳しくなる徴兵状況に対処するため、彼はまず保民会議で、今回の徴兵は金納（皆からお金を募集して、人を買って壮丁とさせる）で対処すると提案し、民衆の警戒を緩めようとする。そして、保民会議の主席でもある妻の兄に頼み、会議の席で、他の参加者に金納の提案に賛成してもらうようにした。金納の提案は実は嘘であり、康玄蚕子が油断して野外から家に帰ったところを、捕まえようとする。結局、康玄蚕子は反抗の末、刀で右手の人差し指を切り落としてしまい、大きな傷を負ったため壮丁として送り出せない。これで李蝦扒のすべての工夫は無駄に終わり、その狡猾と陰険が露わになり、同時にそれが読者の笑いを引き出すこととなる。

この小説は日中戦争期の『在其香居茶館里』『替身』と通じる風格で書いたものである。内戦初期のような強烈な感情が次第に冷静になり、作中人物と一定の距離を持ち『李蝦扒』を書いたと考えられる。しかし、内戦期の短編小説をまとめて見ると、日中戦争期創作の芸術レベルに近いのはこの一編しかない³¹⁾。そして、1949年の中華人民共和国建国後は、「暴露」と「諷刺」の創作はもう時代と共産党に求められる文芸に相応しくなくなったため、沙汀も徹底的にそれを放棄した。ユーモアある筆致、冷静、含蓄のある諷刺手法で四川農村社会を

生き生きと描く作品は、『李蝦扒』を絶筆として終止符を打ったと言えよう。

6 おわりに

1992年、沙汀は自身の創作生涯を振り返りながら、「私は何のために創作するのかずっと考えていた。いかなる小説を構想する時も、これが人民に有利かどうか、またそれが現実生活の中でどのような役割を果たしているかを考えることを忘れたことがない³²⁾」と述べた。このような意識が、1930年代の中国左翼運動の流れの中で形成され、その後も沙汀の創作に変わらず残り続けた。本稿で取り上げた「拉壮丁」の状況を描く作品は、このような文学の現実性を強調する立場から書かれたものである。また、沙汀は自身の創作の探求の道を進み、異なる時期に異なる個性の作品を生み出していた。

共産党に入党し、実際の政治活動に身を投じてから執筆に転じたという経歴を持つ沙汀は、「党」と「政治工作」を「文学創作」の前に置いてきたとみなされることもある。そのため、彼の創作は「共産党の宣伝にふさわしい単純な世界しか描けない³³⁾」とする論断もある。しかし、本論の分析から見ると、たとえ同じく左翼作家の立場で同じく「拉壮丁」という主題を書く小説でも、一概に彼の文学創作を政治性だけがあることと判断するのは明らかに非現実的である。特に日中戦争期にユーモアの筆致で書いた『在其香居茶館里』『替身』などの作品は、四川社会の現実と四川人の特質を生き生きと描き出し、独特な風格を備えており、中国現代文学史に優れた諷刺作品を残したと言えよう。

注

- 1) 姚燕「微探四川軍閥の兵源来源問題」『金田（勵志）』、広西玉林市文学芸術界联合会、2011年12期、55頁
- 2) 劉一民「論抗戰時期四川農民对兵源和后勤的貢獻」『四川抗戰档案研究』、西南交通大学出版社、2005年8月、108-109頁
- 3) 沙汀「談自己的創作」『沙汀文集・第七卷：文論』、四川文芸出版社、2017年11月、6頁

- 4) 「時代大潮流衝擊圈」という言葉は、沙汀自身の自伝に用いられたもので、1927年の四・一二クーデター以降、故郷の四川から上海へと移り、抗戦が勃発する前十年間に経験した時代の波乱を要約している。同時に、この言葉は沙汀がこの時期の創作のテーマを要約したものとも言える。沙汀「時代大潮流衝擊圈」『沙汀文集・第十卷：回憶録・沙汀自伝』、76頁を参照
- 5) 茅盾は公式刊行物で沙汀の文章を賞賛したが、ひそかに周揚に渡したメモで沙汀の創作は印象的であると指摘した。「これは私が周揚の家で見たものである。茅公（茅盾）はメモに、『この（沙汀の）ような印象的な表現方式は好きではない』と書いています」（『沙汀文集・第十卷：回憶録』、107頁）沙汀自身もこの問題を意識した。自分の創作は「ある程度の概念化的な傾向があるに違いない」（原文は：這一时期的作品，它們一般都存在着一定程度的概念化傾向）と記している。（沙汀「『沙汀短篇小説集』後記」、『沙汀文集・第七卷：文論』、39頁）
- 6) 「この変化は私にとっては非常に意義がある。そしてこの変化を助成した重要な原因の一つは、私が1935年に一度故郷に帰ったからであった」。（沙汀「『獣道』題記」『沙汀文集・第七卷：文論』、34頁）
- 7) 李慶信『沙汀小説芸術探微』、四川社会科学出版社、1987年11月、103-104頁
- 8) 『沙汀文集・第十卷：回憶録』、142頁
- 9) 楊晦「沙汀創作的起点和方向」、原載『青年文芸』新1巻第6期、1945年2月15日。ここでは『沙汀研究資料』193頁による。
- 10) 呉福輝『沙汀伝』、十月文芸出版社、1990年6月、22頁
- 11) 『沙汀小説芸術探微』104頁
- 12) 馬学永『沙汀小説対現実主義の多元探索』、南京師範大学博士論文、2013年、33頁
- 13) 例えば「保甲_渝行営業強拉壯丁」（『四川日報』1937年第11巻6期、223頁）、「省府令各県勿強拉壯丁」（『四川月報』1937年第11巻5期210-211頁）、張国維「論拉壯丁之原因及其補救方法」（『現代読物』1938年第3巻第2期巻27-30頁）などの新聞が挙げられる。
- 14) 沙汀「睢水十年」『沙汀文集・第十卷：回憶録』、326頁

- 15) 同上、236頁
- 16) 中裕史「沙汀と艾蕪——人物形象の対立と補完」『アカデミア』（人文・社会科学編）、南山大学71号、2000年、73頁
- 17) 『沙汀文集・第七卷：文論』、34頁
- 18) 陳平原『陳平原小説史論集（上册）』、河北人民出版社、1997年版、180頁
- 19) 沙汀「努力学习，不断提高」、原載『四川文芸』1961年11月号。ここでは『沙汀文集・第七卷：文論』340頁による。
- 20) その時、沙汀が住んでいた華裕農場には、技術者である陳という人物がおり、彼の甥が壮丁に引っ張られた後、解放されたことについて沙汀に話していた。この出来事が『在其香居茶館里』の物語の題材となった。（沙汀「漫談小説創作中的一些問題——在成都日報『工農兵』文芸周刊業余作者座談会上的發言」『沙汀文集・第七卷：文論』55頁参照）
- 21) 1945年春夏の交わり、沙汀は川辺で一人の老人に出会った。彼はその老人から、髭を剃られて壮丁にされた経験について聞いた。『替身』はこれを参考している。（沙汀「生活是創作的源泉」『沙汀文集・第七卷：文論』、67頁による）
- 22) 欧陽山「抗戦以来的中国小説（1937-1941）」『沙汀研究資料』、279頁
- 23) 『沙汀小説芸術特徴探微』、67頁
- 24) 「家家戸戸愁壮丁」『青年知識』（重慶）1947年第16期を参照
- 25) 『沙汀文集・第五卷：短編小説』、64頁、66頁、68頁、69頁。原文は「我們說好打平日本人就回来的呵」である。
- 26) 『沙汀文集・第五卷：短編小説』、69頁。原文は「他姓廖的跟共产党又没冤没仇」である。
- 27) 沙汀『範老老師』『沙汀文集・第五卷：短編小説』、57頁
- 28) 沙汀『蘇大個子』『沙汀文集・第五卷：短編小説』、76頁
- 29) 沙汀「題記」（1982年10月17日）『中国現代作家選集・沙汀』、三聯書店1984年版。ここでは『沙汀文集・第七卷：文論』110頁による。
- 30) 中裕史「『抓壮丁』にみる四川作家の特色」『アカデミア』（文学・語学編）、南山大学、2018年、第103号、343頁

- 31) 沙汀は官晋東への手紙で、自身のこの間（国共内戦期）書いた小説中、一番成熟なのは『李蝦扒』であると思ったことが書いてある。（官晋東、董剣「沙汀年譜」（1904-1949）『雲南師範大学学报（哲学社会科学版）』1984年8月期、50頁）
- 32) 『沙汀文集・第十卷：回憶録』、5頁
- 33) 夏志清『中国現代小説史』（下巻）、劉紹銘訳、香港中文大学出版社、2001年、270頁